

末黒野

すぐろの

4月号

(通巻884号)



雪

動かざる水の昏さや冬紅葉
枯菊の焚かれて優る匂ひかな
下茹でも仕上げもレンジ凍つる夜
冬椿風棲む庭の主とも
冬薔薇や鳴らぬ穴あるハーモニカ
降る雪や猫につけたる異国の名
踏めば鳴る雪の津軽や葬ひとつ
道標の雪に傾き県境
雪を搔く音に覚めぬる泊りかな
忘年の左利きなる鍋奉行
また一人加はり里の冬田打ち
高層の窓の灯うるむ寒の入

黒滝志麻子
(主宰)

回転灯

実千両早や鳥の目のそこここに
冬満月柞の森の奥透けて
回転灯の赤ばかり増え街師走
真つ先に浸る末子や冬至風呂
思ひ出す手がかりさがし晦日蕎麦
師の色紙かくる書斎の淑気かな
薺粥箸のつまめる野のかをり
落葉踏む音の硬さの命かな
風硬き団地の暮しちゃんちゃんこ
谷よりの風まだ硬し夕笹子
海鳴りの迫る岬や野水仙
懸樋より零るるひかり春隣

森清堯
(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

寒 芹

田中臥石

餅掲きを手伝ふ妻や豪農家
除夜の鐘一打は妻の撞きし音
朝粥を啜る窓透く寒雀
寒芹を摘めり捨て田へ海ひびく
娘には扶けられけり去年今年
初日浴ぶるふたりや成田新勝寺
護摩煙纏ひて夫婦初詣
七種の揃はぬ粥を炊きにけり
はこべらや籬の弛びし飼葉桶
飼葉桶積まれ地を這ふ花はこべ

七 草

森清信子

緩みなき水平線の淑気かな
太郎次郎と慕はるる杉初雀
年玉や見上ぐる孫の喉仏
切株の紅き年輪淑氣満つ
七草の粥や野の色野のかをり
身の籬を締め直したり寒の入
日溜りの石に翹置き冬の蝶
茶室てふ小さき宇宙寒椿
遠浅の渚に吹かれ夕千鳥
龍と化するどんだのほむら波の音



初 日

石黒興平

道草や落葉の上のランドセル
着水をして水鳥となりにけり
年の瀬の寧きひととき鍼灸院
闇を裂く燎火のほむら除夜詣
確かなる八十路の歩み去年今年
雲脱げばかくも眩しき初日かな
耳遠きは長寿と言はれ今朝の春
コンビニのイトインでの御慶かな
一碗の雑煮に家風ありにけり
いろいろと有れど安穩初日記

年 の 酒

岡野里子

波音の風音の崎野水仙
冬三日月刃の光滴らせ
地に画く友禅模様散紅葉
侘助や竹青々と四つ目垣
冬深む鯉は底ひの阿字ヶ池
松千両活け玄関の改まり
一酌は師に献げたり年の酒
凧ぐ海の一島著し初景色
どの径も海へ出る径旅始
風の和ぎ全き富士や明の春

実千両

菅野日出子

こつと消ゆる恩師の笑顔冬の虹
鎮魂の祈り届くや冬北斗
鏡なす仏足石や石路明り
墨滲む御朱印帳や神の留守
银杏枯れ猫の集まる吹き溜り
通学の子等踏みしだく枯葉道
お茶室へ処を得たる実千両
歌かるた競ふは昔酒の宴
初詣胸ポケットの舌下錠
華やかに明けて令和の初句会



乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



初春 大川暉美

山茶花の風吹きぬくる通し土間
干蒲団ソーラーパネルと日をかち
寒風や金波銀波の相模灘
ぶつぶつと煮豆呟く年の暮
除夜の鐘一打の余韻嫋嫋と
初春や福耳揃ふ三世代
行き交うて香り残すや春小袖

ちゃんちゃんこ

岡田史女

武蔵野や雪吊りの棒ゆるぎなし
菰巻きの男結びと徒結び
能書きを垂れてゐるなりちゃんちゃんこ
この道を直に歩まむ去年今年
正月や円相の軸床の間に
金満家めくや初湯に柚あまた
直系は男の子一人や親子草

パフェ 小田嶋野笛

北風や急勾配の画家の屋根
人待つや冬の喫茶にパフェ尖り
夢いまだシャンソン歌手や冬帽子
裘をとこの形のまま抛られ
身の内に老ロシナンテ哭く馬日
ももんがに棲まれ平家の血筋とや
懇ろに舐むる肉球炬燵猫

冬 銀 河 加藤 静江

枯蓮を悼むが如く鷺歩む
令和はや二年を迎へ冬木の芽
実千両一粒づつの日の温み
寒月の空に濁りのなかりけり
東雲や淑気みちたる新元号
初日影差して富岳の目覚めけり
旅立^悼ちを見送る窓や冬銀河

年 玉 齊藤 マキ子

アイロンの熱くなる間や夕しぐれ
うたた寝の夫に肩貸す暖房車
ふりむかぬ吾子の背幅や冬の月
病む夫を叱り励まし年暮るる
取り寄する贅沢少し節料理
操舵室の小さき神棚鏡餅
背の丈をほめて年玉渡しけり

初 笑 今村 千年

泰然と西へ流れぬ枯木星
読初や師の添削の乙矢集
先生の机上に供花や初句会
息災をひとりひとりに雑煮膳
猫のみて子と孫の来て初笑
古老なほ指図あれこれ屠蘇の酔
拍手の音美しや初詣

日脚 伸ぶ 及川 照子

古民家のむかし遊びやかなるた会
日脚伸ぶ背筋を伸ばす余生なる
ふるさとへローカル列車日脚伸ぶ
富士を背に冬の怒濤の高まりぬ
瞑想のかたち漢の懐手
水仙花ギリシャ神話の美少年
恋のごと燃えて明るき冬紅葉

冬 の 百 舌 堺 昌 子

一年を短く思ふ年の夜
一尺の眼なし達磨や冬晴れて
先生へさよならの声冬の百舌
ゆつくりと廻る水車や寒土用
山道のためきの匂ひ寒の入
釣り人の囲む大池冬の鵞
若菜摘む流れに勝る川の音

寒 椿 高木 邦雄

はや暮るる冬至の鐘の余韻かな
残照に鳶舞ふ磯や葦枯れて
海見ゆる園の水仙汀女句碑
借景に富士置く庭や寒椿
臘梅の香の満つ庭に佇めり
左義長の逆巻くほのほ竹弾く
大太鼓鳴りて点火のどんどかな



神の旅

太田良一

平成の終の梅が香初音茶屋
観梅や耳順の人を先頭に
支柱得て満を持したる臥竜梅
囀を集め裏山膨める
切口の光る切株ひこぼゆる
前を行く歩幅に合はす花見かな
薫風や兄といもとの滑り台
禅寺の百の説法吹流し

少年の競ふ逆立ち雲の峰
山姥を連れて来さうやはたた神
山風を馳走となせる昼寝かな
石段をかけ声のぼる神輿かな
唐黍や白い齒並の離島の子
汽水湖の水の松江よ水の秋
流星や子牛生まるる谷戸の里
氏神の移転の社穴惑
跳ぶ雲や神馬使はぬ神の旅
普段着の似合ふ下町酉の市
ぼろ市や叩いて鳴らす自鳴琴
留守電に見知らぬ声や隙間風

努力賞受賞作品抄

風薫る

遠藤清子

春光や池に浮く鳥潜る鳥
 ふくらみを風の促す牡丹の芽
 花片のつきたる傘の干されをり
 取水堰開くれば春の川となる
 長き髪靡かせて漕ぐ半仙戯
 夏萩の傾れ咲く壕五万石
 さくらんぼ初物は先づ仏壇へ
 苔庭に転ぶ実梅や紅ほのか
 草野球の逆転ホーマー風薫る
 一雨に一色重ね七変化
 満天の星のもてなし鮎の宿
 葉をたたみ今日を豊みて合歓の花
 狛犬の阿吽踏ん張る残暑かな
 難問のするりと解けて秋澄めり
 叢雲や時をりのぞく二十日月

努力賞受賞作品抄

籠 枕

芝田幸恵

露の臺からりと揚げて抹茶塩
 ふらここに誰もこぬ日や風遊ぶ
 若芝や膝やはらかき太極拳
 失せ物はみなここにあり青葉闇
 糸杉の陰影深し遠閑古
 歳月の色は飴色籠枕
 走馬灯走り書きめくひと世かな
 ほつこりと老いを養ふ零余子飯
 鯛雲一舟もなき相模湾
 流星となりて夫来よ逢ひにこよ
 鶏頭の赤にたぢろぐ日なりけり
 野菊摘む莖にほのかな日のぬくみ
 心音のこととことと冬のお正月
 婚決まるこの日を真中に抗はず
 大寒やこの日すべてに抗はず

努力賞受賞作品抄

地の鼓動

長尾タイ

逆上がり地球の春を一回転
 撫しの芽吹き春の風を
 空堀の残る山城草萌ゆる
 花の宿瀬音に揺るかづら
 野に遊ぶ足裏に響く地の鼓動
 蟬穴を立つく少年の黙の底
 夏木立横つ笛庵の寂寂と
 思草思慕の深き膝を折る
 鉦叩闇の隙間を打ち鳴らす
 寝ねがてや野分の音を枕辺に
 文豪の句碑読む寺苑初時雨に
 冬桜の花す壁にひそむ影寂
 枯蔦の綾なすや鳥の春影
 神鈴に轟く太鼓の千代の煮
 髭面揃ひ十人分の雑煮
 腕

努力賞受賞作品抄

風鈴市

宮元陽子

春の日やずらりと並ぶ素地の皿
 水温む土黒と荒起し
 強東風や火の櫓の風見鶏
 平成の子ためらひ棄てて飛び立てり
 燕の子ためらひ棄てて飛び立てり
 梅雨籠めの明治の木橋大井川
 風鈴市産地の景を音にのせ
 不足なく三食済ます終戦の日
 爽やかな木香纏ひて宮大工
 道産子の鬘を凌ふ流れる雲
 秋のや熱気と渾名村芝居
 一斉の拍手と渾名村芝居
 月今宵の礁に波の踊り声盛
 ぼろ市や神棚を売る声盛
 冬落暉海に溶けゆく光の尾

夏 燕

野村重子

飛ぶさまに辛夷百花や駅広場
 風凌ひ風に乗り捨ての半仙戯柳
 揺れ止まず子のめぐり捨てる水仙
 春風や軍港めぐり船の水尾
 イースター子ら手造りの染卵
 迫り来る世の波飛び燕
 豆飯や二人のくらし恙無く
 整然と植田のそよぎ雲映し
 秋雲に問ふ新しき何ぞやと
 川底の石の斑しき水と秋
 今日出来ることの幸せ小鳥来る
 晩秋や高原を行く一両車
 靴埋む銀杏落葉のぬくもりに
 冬木立染めて落暉のあかかも
 波に乗り波に滑りて冬かかもめ

雲の行方

丸山千穂子

初午や幟はためく過疎の里
 ひとひらの桜柄杓に神の水
 雨を得て日を海人の背夕日浴び
 永き日や若き海人の背夕日浴び
 捨舟の影濃き浜や夏近し
 揚舟を引きて艇庫へ夕焼かな
 日の匂ひ草の匂ひや梅雨あくる
 町辻の夜の空明るし地蔵盆
 赤とんぼ安曇野統べてまさなり
 ひとひらの雲の行方や秋の天
 秋澄むや眼光放つ不動尊
 潦手鏡ほどこに寒露の夜尊
 反り橋を写す水面や初時雨
 蜚鳴の家の軒先二間掛大根
 鈴鳴らし幼の受くる破魔矢かな

跳ねる

谷口律子

香煙に掬ふ春の日はねむらかき
 沙汰のなき友を訪ねむ二月尽
 ひとひらの花点字読み初蚊かな
 音もなく居間のドアより魚跳ぬ
 新緑を映すため池魚跳ぬ
 大仏の太き項や青嵐
 緑蔭に駆け込みむ幼見失ひ
 梅雨の街傘さす人とささぬ
 鳴立の西行歌碑や梅雨の蝶
 睡眠魔来て車内扇風機の微風
 人混みの中を開けり草紅葉祭
 切通しの突と紅葉の造花め
 ビル谷間残る紅葉の造花め
 薄らと濡るる岩肌石路明り
 咳き込みめば棘ある視線発車ベル

鎮魂歌

渡辺富士子

着替せず寝入る幼児や雛の夜
 三笠艦の歴史展示や碇草
 溢れ出る富士の伏流はだれ雪
 大杉を大蛇のごとく藤の花
 花街の紅殻格子山桜桃の実
 サングラス目に入るものの柔らか
 風死せり新橋地下のシヨットバ
 糠漬に振り回さる薄暑かな
 古民家の土間のでこぼこ竈馬
 融通の気かぬ頭や花梨の實
 美し国の秋の震台風鎮魂歌
 山の辺ののの七草川明り
 犬槇の幹の秋の振れや冬のざり
 除夜の鐘話のし寝れ入り冬座敷
 漆喰の壁の乱れや冬の座敷敷

湘南の海

長尾タイ

野分雲浦曲に舫ふ舟の数
纜の固き結び目うそ寒き
濁流の一筋海へ野分晴
磯菊や昼を灯せる海人の小屋
秋徼雨網を繕ふ老の影
潮風に絡む秋思や鳶の笛
秋夕焼白砂に残す恋の詩
秋没日一礼深く漁夫去りぬ

秋簾軒先走る三輛車
遮断機の無き江ノ電やそぞろ寒
江の島へ渡る大橋涼新たに
石段を弾く木の実や朱の鳥居
手水舎の水吐く龍や秋気澄む
頼朝の寄進の鳥居秋の声
洞窟に住むてふ龍やつづれさせ
侵食の進む断崖星流る
海原の七島掠め雁渡る
島鼻に寄り添ふ親子鯊日和
潮境鯊釣り舟の見え隠れ
秋落暉吃水深く舟帰る

青炎集

黒滝志麻子選



横浜 廣田幸子

狭山 沼崎千枝

片付くる棚に物増し十二月
日短の為すべきことの多きかな
居酒屋の旨き雑炊鍋のあと
年末の省略多き大掃除
無事といふ無二の宝や大晦日
甥の背の又伸びてゐるお年玉

刃を研ぎて冬至南瓜に挑みけり
平林寺の雑木林や寒鴉
去年今年産土神へ拍手を
パーティーへフリルのドレス懐炉貼り
大マスク挨拶返し誰かしら
歩数計今日は五千歩日脚伸び

横浜 池乗恵美子

横浜 橋場美篤

小春日の日向の母のにはひかな
一茶忌の小春に遊ぶ雀かな
人波へ引き寄せられて年の市
普段着に光るブローチお元日
段葛の一步一步の淑気かな
数の子や命舂めく一欠片

まなうらの母の夜なべや毛糸編む
踏み締むる銀杏落葉や築地堀
漱石忌俳縁といふ宝物
江の島に望む遠富士淑気満つ
手押しポンプなほ使へるや飾藁
来し方を覆むる傘寿や初鏡

横浜 神谷さうび

横浜 占部美弥子

恵方道人と車のせめぎ合ひ
雑踏の寺町通り年新た
水煙へ朝日差しある淑気かな
渦描く箒目確と去年今年
十六の井の小暗さや寒四郎
ししう糸百色揃へ冬籠

賜りし茶碗に朝茶冬ぬくし
寒に入る餌幾重に船の笛
タンカーの数多往き交ふ年の暮
冬の灯や猫と店主の骨董屋
句碑百基囲む紅添ふ寒椿
電飾の町を遠見に空つ風

横浜 佐藤康子

横浜 滝沢いみ子

駅頭や革手袋の踏まれゆく
手品師の口より炎クリスマス
マンションの杵音高く年の暮
人待つや又マフラーを巻き直し
着ぶくれて声使ふこと忘れけり
七草や大釜で炊く民家園

正月や家族ゲームに本気出で
小春日の波の光やモノレール
御籤を希に夫引く初詣
七福神最後の僧の話し好き
初鏡バックを試し呑気なる
左義長や炎の音と波の音

横浜 梅田武

横浜 飯田久美子

元朝や先づは仏へ熱き茶を
吞初てふ季語の非ずや屠蘇を酌む
青天や句会始めへ感謝の歩
腕白の御慶敬語の二つほど
寒卵の豊かなる黄をすすりけり
日向ぼこ今日の句心どこへやら

化粧坂吾も踏み行く朽葉道
忘れえぬ大学芋の蜜の味
孤独また一つの力冬木立
時といふ止まらざるもの去年今年
新年の俳句附録に恩師の句
福詣の色紙に余白なかりけり

耕 土 集

森清 堯選



落葉降る昨日の上に今日の色

横須賀 宮沢 久子

反故にする句稿の山や年の暮

まつすぐに声引き飛へり冬の鶉

印西 大坂 正

暁光の鎮守の杜や笹子鳴く

初祈禱鈴の音さやと巫女の舞

岩つたふ常の水音淑氣満つ

麦の芽の丈の確かに揃ひけり

初詣燈に鋭き目の石狐

房総の初空高く伝書鳩

迷ひ鳥の一羽に崩れ鳴の陣

横 浜 小原 紀子

暮早しさぐりさぐれる鐘の穴

裸木や独狂言めく鴉

横 浜 鈴木 英雄

短日や杼はいそがしく右左

初曆波郷の句よりはじまりぬ

船橋に等間隔の百合鷗

歳時記の古き書込み寒灯火

微睡の猫の薄目や置炬燵

冬紅葉残る一葉に宿る意地

横 浜 宮地 静雄

読めぬ字も誤字もそここ古日記

真直ぐなる飛行機雲や初御空

茅ヶ崎 嘉味田 朝

三ヶ日心ふれあひ助け合ひ

着ぶくれや人は無口になつて行き

よく晴れて曾孫生れて冬満月

一幅の絵を成すベンチ散紅葉

年亡黄泉の噂の飛入りて

生くることは挑むことなり大旦